

神の教え(律法)が与えられる

《 聖書全体の中の本項の位置 》

人間はエデンの園から追い出されましたが、神に見捨てられたわけではありません。
エデンの東に追いやられた人間が、幸せに生きてゆくために、
神は「このように生きていきなさい」という教えを人間に与えました。
この教えのことを日本語では「律法」と呼んでいます。
この教え、つまり律法こそが旧約聖書の中心です。
律法をよく学んだ人々が、「文学書」も「預言書」も書きました。
新約聖書のイエス・キリストの教えも、律法と関係づけて語られます。
律法は新約聖書を理解する鍵になります。

アダムの子孫のイスラエル民族

アダムから長い年月が経ち、その子孫からノアと言う人が生まれ、さらにその子孫からアブラハムと言う人が生まれ、その子孫からイスラエル民族ができました。(詳しいことは、第4級で学びます。)

しかし、そのイスラエル民族が、隣国のエジプトで奴隷になってしまいました。そこにモーセという指導者が立ち、エジプトを脱出し、先祖の土地に帰ります。これをイスラエル民族の「出エジプト」といいます。紀元前 1270 年ころのことです。40 年にわたる荒野での脱出旅行中に、神は「お前たちはこのように生活しなさい」という教えと、「お前たちはこのようなことをけっしてしてはいけない」という禁止の教えと、合計 600 余の教えを与えました。これをヘブライ語で「トーラー」といいます。このヘブライ語は世界的に有名な言葉です。(孔子といえば「論語」、モーセといえば「トーラー」のように)。

「トーラー」とは「教え」という意味です。日本語ではこれを「律法」と訳しています。 40 年かけて荒野を旅しながら、彼らは先祖の土地に帰りました。この荒野における 40 年の脱出旅行物語は、第3級の2項でくわしく学びます。(第5級では、イスラエル民族は「律法」すなわち「トーラー」を与えられたということを覚えておいてください。)

この「律法」(教え)にしたがって、イスラエル民族は、古代ではめずらしい、団結力の強い、道徳心の高い民族になっていきました。

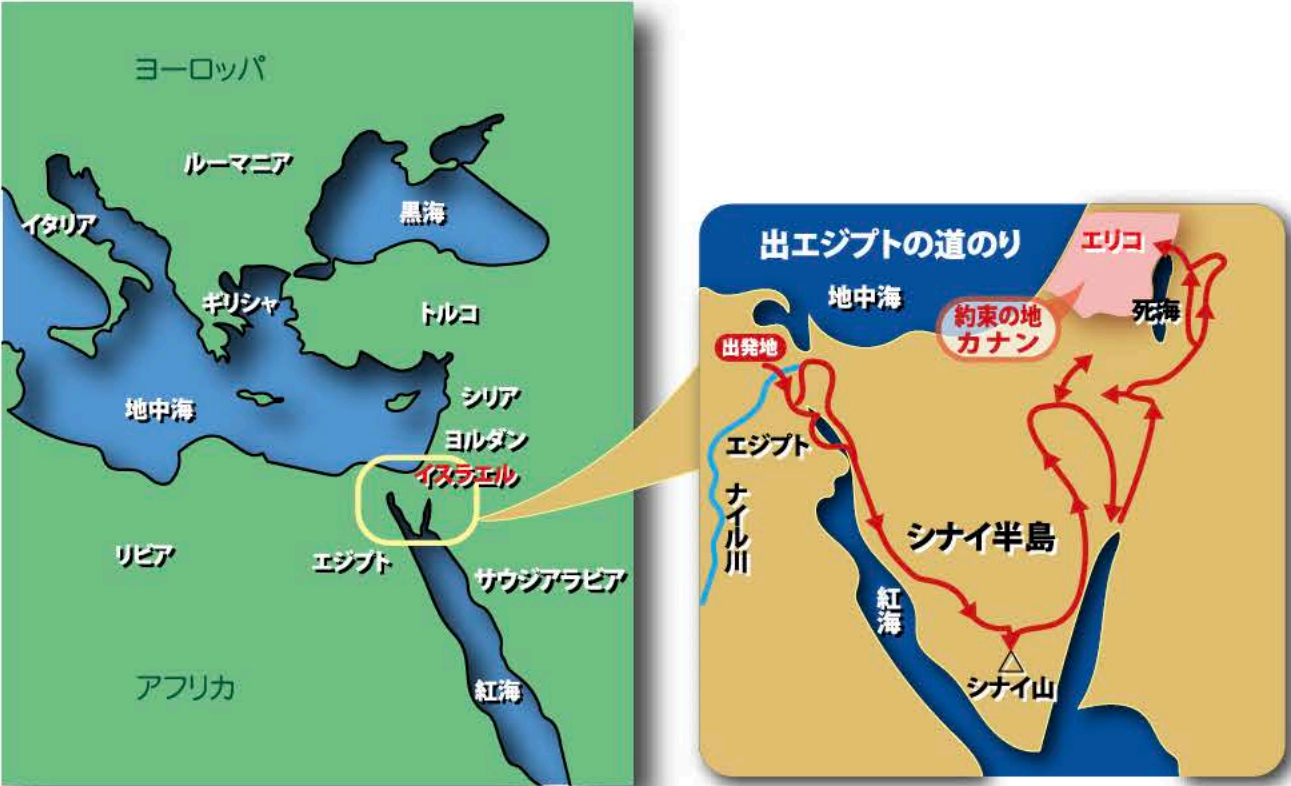
この民族は、地中海の東の端、今のイスラエル国のあるあたりに住んでいました。この地方は地理学的でいえばパレスチナ地方と呼ばれます。非常に古くはカナン地方とも呼ばれました。

NOTES

NOTES

カナンという地名は「キナクク」(貴重なものだった「紫色」の染料のこと)から来ていました。地中海で採れる「ムラサキ貝」から紫色を採ったそうです。この地方が聖書の舞台です。「カナン」という地方名が、現在では「パレスチナ」と呼ばれていることを覚えてください。(その中の一部がユダヤ地方やサマリヤ地方になるわけです。)

今では車で8時間もかければエジプトからパレスチナまで行けますが、なんと彼らは40年間もかけて奴隷になっていたエジプトから、自分たちの先祖の土地に帰りました。長引いた理由は、イスラエル民族が「主」という名の神を捨て、偶像を拝んでしまったからです。それで神は彼らに「なすべきこと」と「なしてはならないこと」の「トーラー」(律法、教え)を与え、荒野の苦しい旅行生活の中で訓練しました。「かわいい子には旅をさせ」という諺がありますが、40年間の苦しい生活と新たに与えられた神の教えによって、イスラエル民族は鍛え上げられた民族になりました。この神の教えは、いつもモーセを通して与えられましたので、「モーセの律法」とも呼ばれます。



どこに書いてあるか

律法は、旧約聖書の最初の五巻の中に書いてあります。すなわち「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」、「民数記」、「申命記」の五巻を指して「律法書」といいます。あるいは、「モーセ五書」とも呼ばれます。

これら五巻以外の他の旧約聖書に、どんなに良いことが書いてあっても、それらを「律法」(トーラー、教え)と呼ぶことはありません。律法は、神から直接与えられた神聖な教えであり、絶対的な命令なのです。

難民のようにエジプトに流れ行き、脱出し、荒野を40年にわたって旅行した物語とその期間に与えられた律法のすべてが、どこに書いてあるかと言えば、モーセ五書です。旧約聖書の最初の300頁余になりますが、一度ゆっくり読んでみてください。ユダヤ教では、現在も毎週土曜日に、会堂で、モーセ五書つまり律法書を、一年間かけて読み学んでいます。ユダヤ教とは「モーセ五書」(律法書)の教えを守る宗教です。それほどに「モーセ五書」は重要であるということです。

「モーセ五書」(律法書)

創世記

出エジプト記

レビ記

民数記

申命記

物語と律法とが混ざって書いてある

旧約聖書の最初の五書（律法書）は、第1部「歴史」の初めの部分でもあります。アダムの子孫の歴史物語と律法（教え）とが、混ざって書かれています。つまり、第一条、第二条・・・というように書いてあるわけではありません。物語の中から「教え」の部分だけを取り出さなければなりません。このため、「教え」の数は、人によって異なってきます。ユダヤ教のある派では、「613 個の教え」と言っています。だいたいそれくらいの数になります。

613 の教えのいくつか



ではその 613 の教えのいくつかを拾い出してみましょう。

- 「主以外の神を信じてはならない」（これが「613」の最初に選ばれている、いわば第1条です）
- 「偶像を作ったり、拝んではならない」
- 「殺してはならない」（殺人は理由のいかんを問わず厳禁です。ただし、死刑は殺人にあたります。）
- 「あなたの父母を敬え」
- 「占いを行ってはならない」（レビ記 19:26）
- 「食べてよい生き物は、ひづめが分かれ、完全に割れており、しかも反すうするものである」（レビ記 11:2－3）。したがって牛肉はいいが、豚肉は反すうしない動物の肉ですから、食べてはいけないものです。新約聖書になり、何を食べてもよいと教えられているので、キリスト教徒は何を食べてもよくなりました。しかし、旧約聖書だけを經典としているユダヤ教の人は、けっして豚肉を食べません。
- 「復讐してはならない」（レビ記 19:18）

このように「律法」の中には日常生活のきまりが 600 以上も定められています。イスラエル民族は、これらの教えを守って生活するように厳しく教えられ、訓練されました。新約聖書に出て来るイエスも弟子たちも、これらの教えを守って生活していました。現在もユダヤ人の多くは、これらを守って生活しています。律法のことを知らないまま新約聖書を理解することはできません。

NOTES

有名な聖書の句

「殺してはならない。」
(出エジプト記 20:13)

どのような理由があっても人を殺してはいけません。

律法は神の「命令」ですから、殺してはいけない理由は書いてありません。神がいけないというものは、神がいけないという理由で殺してはいけないのです。これが聖書の基本的な立場です。このような聖書の一方的な主張に反発を感じる方がおられるかもしれませんが、しかし、神中心主義というのもまた聖書の勉強の重要なポイントですので慣れてください。

「殺してはならない。」

出エジプト記 20 章 13 節

難しい語句の説明

律法

「律法」という言葉は、何かむずかしく、古い日本語に感じますが、本項で学んだように、日常的な「教え」です。人間が幸せに生きていくため、神から教えられた、分かりやすい教えです。

ただし、すべて「〇〇せよ」とか「〇〇してはならない」とかの命令文で書かれています。律法は神からの命令なのです。人間がそれらの良し悪しを議論することすら許しません。神は万物の創造者であり全能者ですから、命令文であるのは当然のことだと考えられています。

おもしろポイント

なぜ豚肉を食べてはいけないの？ なぜ今はいいの？

旧約聖書レビ記 11 章に、豚は「反芻しない動物の肉を食べてはいけない」と命ぜられているからです。なぜ反芻しない動物がいけないのですか。なぜ、なぜと聞かないでください。神がだめだというのは、神がだめだという理由でだめなのです。でも、豚肉はおいしいし、なにより飼育しやすいし、したがって安いし、いいことづくめです。もし豚肉を食べてはいけないと言うなら、お隣の民族と仲良くするために、食事会をしたり結婚したりできないではありませんか。そうですね。それがねらいかもしれないですね。他の民族と仲良くすれば、すぐに「うちの神様と一緒に拝みましょう、あなたの神様も拝んであげるからさ」というように偶像信仰が入り込んできます。唯一の神「主」への信仰心がどこかに消えてなくなります。唯一の神「主」への信仰を守るためだったかもしれませんがね。

でも、イエス・キリストの十字架の話を一度でも聞けば、それはショッキングな話ですから、人はその話を生涯忘れません。もはや偶像信仰は、入る余地すらありませんから、キリスト教は何を食べてもよくなったのだと思います。